令和５年度　第２回総合教育会議

飯田の社会教育に対する外部（大学研究者等）からの評価と公民館の課題認識

Ⅰ　評価

☆飯田は学びの宝庫であり可能性を有しているまち

〇飯田は大学研究者や学生にとって住民自治やまちづくりを学ぶことができる格好の場

〇様々な場面で、市民による主体的な取組が活発に展開されている（様々な事例がある）
また、市民と行政との協働によるまちづくりも推進されている（支える仕組みがある）
例えば

【公民館活動】
- 住民の意識：公民館は施設ではなく活動（公民館をやる）
- 活動を支える方針や体制の担保（公民館運営の４原則　公民館の体制）
- 人材を育む規範、仕組み、土壌

【いいだ人形劇フェスタ】
- コンセプト：みる、演じる、ささえる　トライアングルステージ
- みんなでつくる（参加証ワッペン方式）

そのほかにも、環境面、産業面、観光面など様々な分野で、モデル的な取組が数多く展開

＊なぜ、地方都市飯田でこのような取組が活発に展開されているのかが、大学研究者等の研究や学習のテーマになる

＊学輪 IIDA（＊Ⅰ）における地域と大学との連携による様々な取組
- 「モデルカリキュラムの展開」「高大連携による次世代育成」「市民、学生、大学研究者でつくる学びの輪」など様々な取組が、地域と大学との連携のもと展開できる地域は滅多にない

☆背景にあるもの

〇住民の主体的な活動の源泉である「結いの精神」　「ムトスの精神」
- 結いの精神：飯田の語源　お互いに心を通わせ、力を合わせる（相互扶助）
- ムトスの精神：飯田のまちづくりの行動理念・合言葉

〇飯田の人柄、風土、気質
- 話好き、理論好き、世話好き、人の良さ、醸し出す雰囲気
- 進取性や学究性に富んだ気質
（外部の人や事を柔軟に受け入れ、自分たちのものにする寛容さ）

〇豊かなソーシャルキャピタル
（社会関係資本・地域や社会における人々の信頼関係や結びつきが強い）
- 飯田は豊かなソーシャルキャピタルが蓄積し、それがまちづくり、文化活動、環境活動等様々な活動につながっているのではないか

（＊Ⅰ）学輪 IIDA
「21 世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」をコンセプトに、４年生大学を有しない「飯田」を起点に大学研究者同士が相互につながり、専門的な知見や外部の視点を生かしたモデル的な研究や取組を地域とともに行う有機的なネットワーク組織として平成 23 年１月に設立。現在 75 大学、146 名の研究者等が参画。

＊自然資源、文化資源、人的資源を蓄積し生み出していく場の存在
・その場を形づくる多彩で総合的な営みが飯田にはある。そのコアとなるのが「自治の意識と仕組み」であり、社会教育（公民館）がこの一翼を担っているのではないか

☆飯田は持続可能な地域社会のモデルになれるのではないか

〇飯田の課題は、日本や世界の課題、飯田での深堀は、日本や世界の深堀につながる
・飯田における持続可能な地域社会モデルは、日本や世界を変えるモデルになり得る
・飯田が有する社会教育的な素地を育み・活かし、今日的・未来の時代に即した形で、あらゆる領域と連動してその営みをバージョンアップしていくことができないか
・飯田にはその可能性があり、大学研究者等が様々な段階、領域で関わり、モデル的な取組を継続していく

２　課題認識

＊公民館を取り巻く状況
●社会環境の変化や価値観の多様化等により、住民の地域や自治に対する意識や関心は希薄傾向
●新型コロナウィルス感染症の拡大による影響
・コロナ禍で、分館も含め公民館の学習交流活動も制限
・地区内における人と人とのつながりや、地域とつながる機会が減少
・一部の公民館委員等の公民館活動に対する意識変化
（公民館活動がなくても困らない、うちの分館はいいだ人形劇フェスタ地区公演をやらない）
←人々の意識や地域のコミュニティに少なからず影響

〇コロナ禍で活動が制限されるなか、公民館活動の目的や事業内容等を見つめ直す機会になった
〇今年度新型コロナの法的位置づけが変わり、運動会や文化祭など様々な事業が再開
（全てを元に戻すのではなく、現状に即した形での事業実施）

＊人や地域とのつながりを大切にした学習や交流により、地域内で互いに関係性を持ちながら心地よく暮らしていける地域を目指す
＊地域に誇りや愛着を持つ人材を育むため、公民館における学習交流活動の更なる充実を図る必要がある